

ひょうごの遺跡

平成11年7月31日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
〒652 TEL 078-531-7011
-0032 FAX 078-531-7014
ホームページアドレス
<http://www.hyogo-edu.yashiro.hyogo.jp/maibun-bo>

わ どうかいちん 和同開珎とその時代

いちべ 市辺遺跡

(氷上郡氷上町)

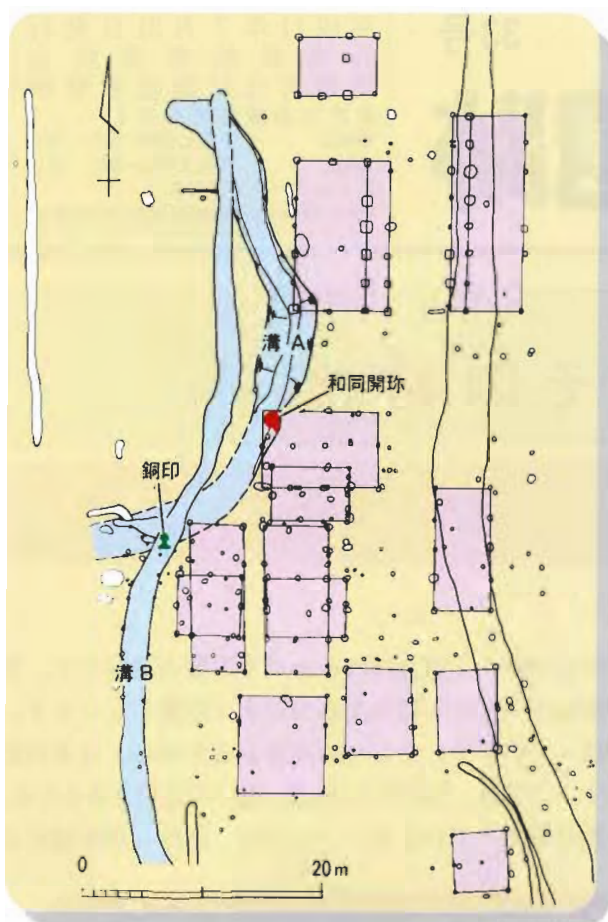
遺跡の立地と環境

市辺遺跡は、北近畿自動車道の建設に先立って調査した弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡です。佐治川と呼ばれる加古川の上流にあたり、かつては舟運の要衝地であった本郷の集落の北東に位置しています。

また、遺跡の東2kmの石生^{いそう}には「水分れ^{みわか}」という地名が残っています。ここは標高がおおよそ98m、日本列島の本州のなかでは最低位の中央分水界（嶺）となっています。つまり、水分れは日本一低い分水界であるため、加古川水系と日本海に流れる由良川水系を繋ぐ結節点の役割を果たしています。ここでは、急峻な峠を越える



市辺遺跡出土の和同開珎と銅印



市辺遺跡全体図（平成10年度）



掘立柱建物跡（全景）



掘立柱建物跡の柱穴断割

ことなく南北の往来が可能な自然の利点を備えているため、一帯は古来より交通の要となっていました。

遺跡の概要

市辺遺跡からは、弥生時代と古墳時代の水路、鎌倉時代の集落などのさまざまな遺構が発見されていますが、今回は「櫻前」という字名の^{さくらまえ}水田から見つかった、奈良・平安時代の遺跡の特徴について考えてゆきます。

調査区の中央部には、古く加古川が流れていた痕跡があります。この加古川が8世紀の初め頃（奈良時代）に埋まり、その後微高地が形成されて、多くの掘立柱建物跡や溝、地鎮のために銭貨を埋めた穴などの遺構が残されていました。

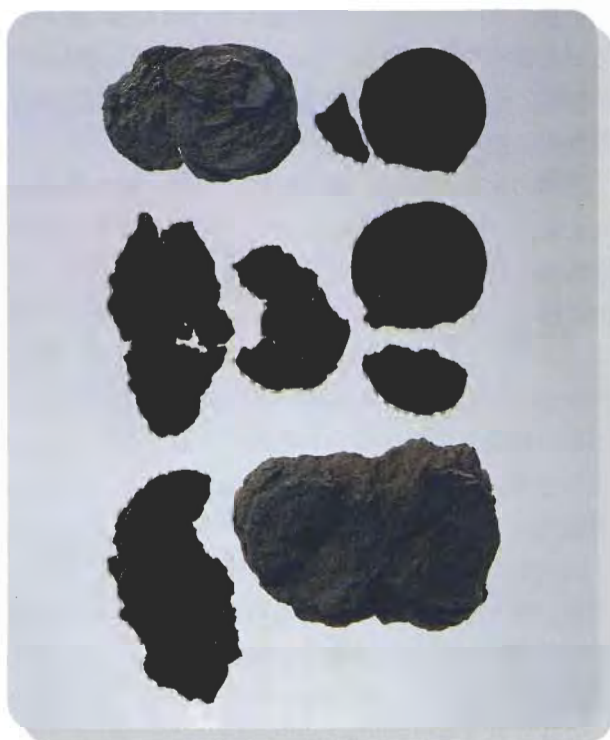
掘立柱建物跡は、字「カブラ田」に隣接する北側の一群からは、東西方向に主軸をもつ2×3間の建物と、南北方向に主軸をもつ2×5間及び2×7間の建物の3棟を検出しました。このうち南北棟は^{ひさし}お互いに向き合っており、いずれも片側に庇をもつ大型建物です。建物の柱を地面に据え付けるための穴は、一辺が80cmほど、中には1mを越える柱穴もあり、四隅が丸い四角形となっています。朽ち果てずに残った柱には、直径が30cmを越えるものもあります。また、大きな上屋を支える柱の穴の底に礎板を敷いて、建物の沈下を防ぐ工夫を施した例もありました。これらの建物は、規模や規格などから判断して同じ時期の遺構と考えられ、出土する遺物から8世紀後半の年代を与えることが可能です。こうした大型掘立柱建物群は一般の住居や集落とは考えがたく、古代の公的施設、つまり地方官衙と想定してよいものです。

大型掘立柱建物群の南には、南北と東西方向に主軸をもつ建物が混在しています。南北方向に主軸をもつ建物は3棟検出し、いずれも2×4間の規模です。東西方向に主軸をもつ建物や南北方向に主軸をもつものの規模の小さい建物は9棟検出しています。このうち2×2間の建物は3棟、2×3間の建物は3棟、2×4間の建物は1棟、間数不明の建物は2棟です。建物群の南端では、4棟の建物を検出しましたが、これらは他の建物と比較して、規格や主軸方向などの統一が図られていないようです。

溝も多く検出していますが、遺物が多く出土し、年代の決定にあたって重要な遺構は溝Aと溝Bです。溝Aは、旧加古川が埋没した後にできた自然流路で、8世紀中頃から後半にかけての土器が大量に出土しました。土層断面の観察によれば、この溝は人工的



和同開珎の出土状況



和同開珎

和同開珎

中国の開元通寶を手本として奈良時代に铸造された銭貨で、最初に発行された皇朝十二銭（官銭）です。銭文を右まわりに配置した円形方孔銭で、銀銭と銅銭の2種があります。『続日本紀』によれば、和銅元年（708）に催铸銭司が置かれ、初めて銀銭と銅銭が発行されました。和同開珎は、当時の交易手段として、また富や権力を象徴する宝物や呪力をもつ儀礼用具として広い範囲に流通しました。

に埋められており、その直後に大型掘立柱建物が建築されました。

溝Aに隣接して、和同開珎や萬年通寶、神功開寶などの皇朝十二銭15枚を須恵器の杯に埋置した遺構が発見されました。須恵器には「金」や「真」の文字が墨書されていました。これは大型掘立柱建物と同時期の遺構のようで、建築の安全を祈願し、地鎮を行ったものと考えられます。

溝Bは溝Aより新しい時期の遺構で、8世紀末から9世紀中頃にかけての土器が出土しました。この溝からは銅印も検出され、注目を集めています。この銅印は青銅製の印章で、鈕は蒼鈕で有孔、印面は一辺が一寸（30mm）の方形で二重郭、印文は「名」もしくは「石」と陽刻されています。形態や規模、印文から判断して私印であり、出土銅印としては、三田市下所遺跡、出石町袴狭遺跡、神戸市下小名田遺跡に続き県内4例目のものとなります。当時、市辺遺跡に勤務していた役人が使用した印鑑なのでしょうか。

出土遺物の特徴

市辺遺跡の出土遺物は、須恵器が多く、土師器が少ない傾向が指摘できます。須恵器では、円面硯や杯蓋転用硯、「田」や「大」などの墨書が特筆され、金属の器を模倣した稜椀（丹波系）も数点出土しています。さらに、量は少ないながら、丹波産と近江産の緑釉陶器が認められます。また、製塩土器の破片が大量に出土しています。こうした出土遺物の様相から考えても、遺跡を古代の地方官衙に想定できます。

遺跡の性格

官衙には、役所の他に交通や軍事の施設などいろいろな性格があります。それでは、市辺遺跡を地方官衙と想定した場合、どのような性格が考えられるのでしょうか。

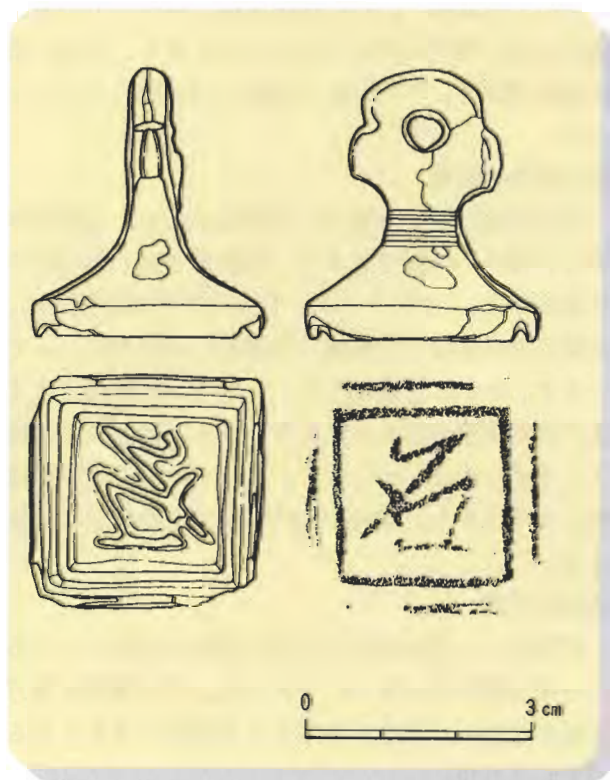
当時の地方行政は、国—郡—郷（715年以前は里）



深田遺跡（日高町）から出土した和同開珎



銅印



銅印（図と拓影）

銅印

青銅製の鑄造印章。日本では律令国家体制の整備に伴い、印章制度が確立されました。令制にみえる印章はすべて鑄銅の方印で、大きく官印・公印・私印の3つにわけられます。印章の主体は公文書に用いられる官印で、内印、外印、諸司印、諸国印があります。いずれも材料や寸法、用法が細かく規定されていました。私印には家印と名印があり、印文は4字と2字のほか、1字のものも少なくありません。

というピラミッド型の縦割組織で、それぞれに国衙、郡衙、郷家と呼ばれる役所が配置されていました。

市辺遺跡は、丹波国氷上郡に帰属します。そして、丹波国の役所である国衙推定地は、亀岡市千代川町近辺が有力です。そこに残された地名や発掘調査の成果からも、丹波国衙である可能性は極めて高いようです。また、氷上郡の役所である郡衙は、従来より氷上町氷上の周辺と考えられてきましたが、現在までに確証は得られていません。そこで、今回の発掘調査の結果、市辺遺跡が氷上郡衙である可能性が高くなりました。

さて、古代の氷上郡の構造については、高山寺本『和名抄』からうかがうことができます。それによれば、丹波国の氷上郡は管郷が16郷からなる大郡であり、全国の平均管郷数の3倍にも達しています。このためか、氷上郡は「西縣」と「東縣」に分割統治され、それぞれに支所を設置して行政実務に携わっていたようです。このうち、西縣は氷上町、青垣町、柏原町、山南町の加古川水系に属し、東縣は春日町、市島町の由良川水系に属します。

近年の氷上郡内の発掘調査によって、地方官衙と考えられる遺跡がいくつか発見されていますが、中でも春日町山垣遺跡と七日市遺跡が著名です。二つの遺跡は8世紀前半には共存しており、出土した木簡から、そこに氷上郡衙の役人である郡司（少領）がいたことが分かりました。そこで、両遺跡は氷上郡衙の東縣支所ではないかと類推されるようになったのです。そうであるなら、市辺遺跡は氷上郡衙の西縣支所であると考えられることができる訳です。

現在も市辺遺跡の発掘調査は進められています。今後、氷上郡衙であることを積極的に立証できる木簡や墨書土器などの遺物や、郡衙にふさわしい掘立柱建物群や井戸などの遺構が発見されることに期待が寄せられます。



袴狭遺跡（出石町）から出土した銅印



兵庫県出土の和同開珎、銅印、二彩・三彩

とうふ 豆腐町遺跡

(姫路市豆腐町)

姫路駅では山陽本線の高架事業が進んでいます。そのため、構内の発掘が夏と冬、2回行われました。ここでは、冬の調査を紹介します。

この地域は、市川、船場川、夢前川など、大小の河川が氾濫を繰り返した所ですが、古くから微高地に人が住み着いていました。現在の姫路駅は微高地の先端部だったようです。

今回の発掘では、奈良時代の遺構を中心に、平安末～鎌倉時代の遺構と明治時代の駅舎の遺構が確認されました。しかし、明治の駅舎造成の際、大幅な削平が行われたため、下層の多くの遺構が失われてしまいました。確認できる遺構の中では、奈良時代中期と末期の2期の井戸が特筆されます。

奈良時代中期の井戸は、縦板組隅柱横棧どめの形式で、横棧のほぞ穴は、交互にあげられています。隅柱の強度を強めるためでしょう。また、掘り方直径1.4m、深さ2.4mありました。縦板は底部に長さ60cmのものが2枚残っただけで、他はすべて抜き取られていました。遺物では、埋土下層から、底

部に墨書（「□」）のある土師器杯が出土しました。井戸廃棄時の祭祀に伴うものと思われます。他に主な遺物としては、底部に「大福」の墨書がある須恵器杯転用硯、二彩小壺、漆容器に転用された須恵器壺、製塩土器などがあります。

末期の井戸は、横板組隅柱横棧どめの形式をとっています。掘り方直径は2.4m、深さ1.8mでした。横板は大きなもので縦横30×120cm、厚さ6～8cmの立派なものでした。井戸は人為的に埋められており、埋土中層から、「井」の墨書のある土師器杯が出土しました。「井」は「井」とも書かれることがあり、これも廃棄時の祭祀に伴うものでしょう。他に、曲物や布目^{まげもの}圧痕のある製塩土器も出土しています。

調査区の北西から南東にかけて河道があり、幅は20～25mで深さは2mでした。この河道は奈良時代の段階では、ほとんど埋没しており、湿地状の窪みとなっていました。ここに大量の遺物が投棄されており、特に河道の東肩に集中しています。主なもの



豆腐町遺跡 航空写真



本町遺跡と豆腐町遺跡

としては、各種須恵器、土師器ですが、墨書土器も多く混じていました。判読できるものとしては、「大山」、「大福」等があります。

遺物出土状況等から遺跡の中心部は今回調査した範囲よりも北側、現在の姫路駅在来線ホーム下にあると推測できます。また、多量の墨書土器、内面に暗文を施した土師器、二彩など、一般集落から出土しない遺物が多く出土していることからこの遺跡は「官衙」的な性格を持っていると推定できます。播磨国府は、姫路市本町遺跡を含む周辺であると言われていますが、その本町遺跡と豆腐町遺跡は直線距離にして900mほどしか離れていません。豆腐町遺跡は国府に付属した施設のひとつと考えられます。また、出土遺物の特徴として、甕・竈などの煮沸具の比率の高いこと、製塩土器や漆容器が多量に出土していることから今回の調査地点は、工房などの機能を担っていたと思われます。



漆容器



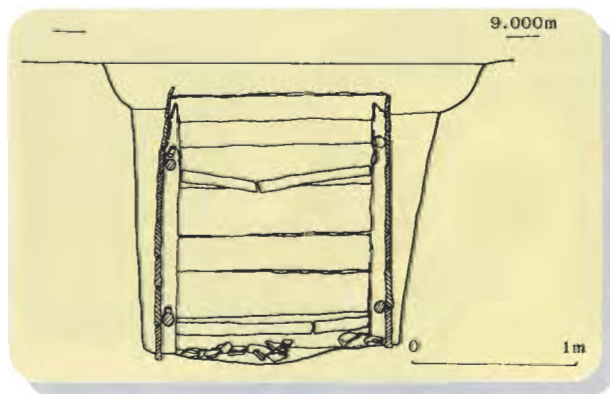
墨書土器 (大山・大福)



二彩



墨書土器 (井)



井戸実測図

三彩・二彩

素地に色釉をかけた彩釉陶器。日本では、唐三彩の技法を模して奈良時代に作られました。緑・黄・白の釉がかかったものを三彩といい、緑・白のものを二彩といいます。

正倉院に所蔵されるものが名高いのですが、遺跡の発掘調査によって明らかになったものも多くあります。これらが貴重品であったことは、県下の出土例が少ないことでもよくわかります。



山南町谷川出土の三彩小壺と和同開珎

トライやる・ウィーク

「トライやる・ウィーク」とは平成10年度から県下の中学2年生を対象に、学校を離れて地域の様々な事業所で仕事を一週間行い、その体験を通じて、生きる力を育み、「心の教育」を推進することを目的とした活動です。今年度は6月に実施されました。

当事務所では、5月31日から6月4日までの一週間、神戸市立夢野中学校の6人を受入れ、「わたしたちの埋蔵文化財を身近に」というテーマで文化財調査を体験しながら、事務所の仕事を体験して貰いました。

初出勤

5月31日午後、夢野中学校から緊張の面持ちで出勤し、所長とボランティア指導員との挨拶、自己紹介から期待と不安の「トライやる・ウィーク」が始まりました。

最初にガイダンス「ようこそ埋蔵文化財調査事務所へ」を受け、施設見学と明日からの仕事と日程の打合せを行い、一日目が終わりました。

出土品整理と保存処理

近世兵庫津遺跡の出土品の分類と接合を初めての仕事として取り組み、なかなか接合はうまくできませんがそれでも頑張りました。

次に、旧遺跡の縄文土器の観察とスケッチに挑戦し、約3,500年前の縄文人と土器を介してのふれあいができました。

続いては「文化財の科学的保存処理作業」を2班

に分かれて行いました。木製品のパック詰めとPEG含浸槽の準備で作業(写真左下)に真剣に取り組む姿です。また、金属製品では脱塩作業に取り組み、疲れながらもなんとかできました。

兵庫区内の遺跡踏査

発掘調査体験のために体力を養うことと身近な文化財を見学する遺跡踏査を行いました。

①「福原京」周辺と兵庫津遺跡周辺を歩く。

②兵庫区に残る前方後円墳「会下山二本松古墳」の見学と、発掘調査を行う上沢遺跡を訪問し、井戸や溝などの遺構を見学をしました。



上沢遺跡で飛鳥時代の土器を掘る

発掘調査

いよいよ最終日は楽しみにしていた上沢遺跡(長田区五番町)の発掘調査を行いました(写真上)。

梅雨の晴れ間の暑い日を珍しい飛鳥時代の木蓋付き土師器漆壺の発見に興奮しながら、初めての体験の内に短い一日を終えました。

「トライやるウィーク」に参加して

「保存処理のにおい」に少し閉口しながらも出土品整理作業から「しんどい発掘調査」まで「元気に楽しく仕事できた」一週間でした。



木製品PEG含浸槽を攪拌する

シンポジウム「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」(開催予告)

平成11年12月4日(土) ピフレSHIN-NAGATA 大ホール(JR・地下鉄新長田駅南すぐ)



編集後記

今回はその遺物・遺構の特殊性から古代の役所と考えられる遺跡を取り上げました。しかし、具体的にどの様な役所であったかについては、今後の調査成果がまたれます。なお、今号の編集を担当していた当事務所のM氏が急逝しました。職務の中における健康管理の大事さを痛感します。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。